

【招く人・招かれる人】

ルカによる福音書 14章7～14節

7 イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。

8 「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、9 あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかいて末席に着くことになる。10 招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。11 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

12 また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。13 宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。14 そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

食事に招かれることは基本的には名誉あること、嬉しいことです。当時の社会でもそういう晩餐会は開催されることがあり、賑やかな社交の場が展開されることはあったと思います。

しかし、それはあくまでも特殊な立場の人たちの「交流の場」だったのではないかと思います。誰でもが招かれたわけではなく、一部の人たちの社交場だったのだと思います。ここでは婚礼の祝宴のこととして書かれています。これは大勢の人たちが参加できる珍しい祭事だったと思います。

イエス様は、時々食事に招かれています。でも、同時にいわば社会的に弱い立場の人たちとも食べたり飲んだりなさっていたようです。「大食漢で大酒飲み」という噂が立つほどでしたから。

さて、今朝の箇所での教訓はふたつ。

1) 招かれる人たちへの注意事項

招かれた人たちの中には、自分は招かれて当然という意識でいる人たちがいました。上座は自分たちの当然の席として考え、そこ以外には座るつもりはないような気持ちでいたのでしょう。

招かれて当然、上座が用意されて当然という意識は言葉にこそ出ませんが態度には明らかにでてきます。そしておそらく表情にもでてくることでしょう。

しかし、そこにあるのは「高慢」であり「分かち合い」を拒否する気持ちです。自分の立場とめんつを保てないようであれば、そこにはいたくない、という気持ち。それは周囲の人たちへの圧力になるし、周囲の人たちを見下す態度にもなり得ます。

イエス様は、その態度はいけない、と教えているのです。

教会などでもそうですが、人間は集会などに何度か出かけると 3 度目からはそれまで座っていた場所を自分のものだと感じ始めると言われます。

別に意識をしているわけではないのですが、「自分の場所」というある種の独占的な雰囲気周囲に伝わると、その件に関しては誰も何も言えなくなってきました。

しかし、そういうことの積み重ねが「交わり」における、横並び意識を壊すのです。自分もそれほど大事なことは思っていないけれど、ある人はとても気にします。自分優先ではない発想を身に着けるためにも、今朝のイエス様の忠告は心に留める必要があると思います。

2) 招いた人

イエス様は同時に、招いた人たちにも警告を發します。

それは「わたしはあなたがたのために、これだけのことをしてあげたのだぞ」という意識を参加者に感じさせないようにという警告です。要するに、「私に感謝しなさいよ」という促しにつながっていきます。

ですから、イエス様は「お返しのできない人たち」をこそ招きなさいと教えているのです。それができないなら、今の形の中で「恩着せがましい態度」はやめるようにということになるでしょう。

招かれた側の人たちにとっては

「自分は招かれて当然だ」という意識を持たないように

招いた側の人たちに対しては

「自分は、あなたがたのためにこれだけのことをしてあげたのだぞ」という意識を持たないように。

＊ ＊

言われてみれば簡単なことなのですが、実行するとなると、これがなかなか難しいのです。

招かれて当然だと思っている人の多くは、挨拶もきちんとしません。自分はここにおいて、当然だと思っていますから、挨拶されることは望んでいても自分から挨拶できない人が多いのです。

やってあげていると自負している人は、報いを期待しますから感謝のことばやプレゼントや、褒め言葉を待っています。それがないと、がっかりして凹んでしまうことさえあるのです。

私たちがこれらのことについて、心を整えたいと思ったら自分とイエス様との関係の中でしっかり意識を再構築する必要があると思います。

イエス様が私たちが神の国に招き、神の家族とし、神の愛で包み共にいてくださるということは、頭の中ではわかりやすいのですが、神の国に招かれたのは当然ではない 愛のゆえ。

神の家族にしていただいたことも当然ではない、愛のゆえ

共にいてくださるということも当然ではない、愛のゆえ

と分かっているにもかかわらず

神様に不平や不満が多くなることがあります。

神様、なぜですか、

どうして私ばかりこんな目にあうのですか

などなど。

基本的には

「神の家族の中にしっかり招かれていて、愛されている」ということに心を留めておく必要があるのでしょうかね。

そして、神様へのお返しとしての奉仕、献金などを考え始め神様のために、あれをやろう、これをやってあげよう、などという発想が生まれることがあります。

実際は、神様への恩返しやお返しではなく、心にいただいた

神様の愛で、報いを期待せず周囲の人たちに心から挨拶をし
必要があれば「これをどうぞ」「お手伝いさせてください」と
いう姿勢を取れば良いのだらうと思います。

イエス様への信仰は決してわたしたちを天使の様に変えるのではなく
地上で小さいものとして人に評価されず、知られずに生きることさえも
喜んで受け止め、そこで誠実に愛を実行しながら生きるということのために
「小さな人」としてそこにおいてくださるのだと思います。

＊ ＊

MACF 礼拝映像はこちらです。

https://youtu.be/qu8hj_oJpGg

＊ ＊

来週 2 月 19 日はお茶の水クリスチャンセンターでの礼拝があります。

ご希望の方は pastor.kaz@gmail.com

まで、ご連絡ください。